

池田高校 SSH 卒業生アンケート

高校26期生 Iさん

(聞き手 社会科 小田)

1 まず、あなたは今どのようなお仕事(生活)をされていますか。仕事の場合は、よろしければお立場もお教えください。

獣医学部生

2 高校時代とはどういう研究をされましたか。

港(九州・沖縄、北海道、桜島)のアリの分布

3 研究活動の上で、最も印象深かったことは何ですか。

国際コンペティションでの発表。1度目は先輩方と一緒に参加させていただき、その背中を見て学ばせていただいた。2度目は私自身が中心となつての参加で、緊張とプレッシャーから思うように話せず、苦い経験となった。しかし、どちらも私にとって良い成長の機会だったと感じている。国内外の同世代が流暢な英語で研究内容を発表する姿や、興味深い様々な研究内容に刺激をうけたこと、コンペティション前後の科学施設見学も記憶に残っている。

4 そこで学んだことはどういうことだと考えますか。

研究の流れ、楽しさを学んだ。炎天下で調査をした結果が様々な場面で認めていただけることにやりがいを感じていた。調査そのものも大変な部分もあったが、先生に教えていただきながら研究班のメンバーと一緒に体を動かすのはとても楽しかった。今振り返ると、調査、解析、考察、発表のすべてがあつて研究なのだということを何となく感じていたのかなと思う。そこには、フィールドワークから研究発表まで一連の研究プロセスを経験させていただいたことが大きかったと思う。

5 SSHの学びにより、科学的な感性や好奇心、思考力は伸びたとおもわれますか。

伸びたと思う。研究の一連の流れを経験させていただいたり、他校の研究をしている生徒の方々や研究者の方々とお話させていただいたりするなかで、新たな視点や興味の対象を得ることができた。実は、研究を始める前は生物学に興味はあるものの、節足動物自体は苦手だった。しかし、アリの研究し、セミなど他の昆虫を研究している他の方々の発表を聞くなかで、昆虫への興味と愛着が湧くようになった。SSHを通して昆虫の世界の面白さを覗けた気がしている。

6 プレゼンテーションやわかりやすく話す力や表現力は付いたと思いますか。

伸びたと思う。校内外で発表の機会を多々いただき、その度にプレゼンテーションの練習をした。他の研究班や高校の発表の良いところを真似ながら少しずつ工夫をするなかで、伝わりやすい話し方ができるようになっていったのではと思っている。英語での発表の機会も多くあり、その際にはネイティブスピーカーの先生にもアドバイスをいただいて練習、工夫を重ねた。そうした過程で英語プレゼンテーションの力も伸ばせたのではないかと思う。

7 高校時代が普通の教科学習だけで終わったとしたら、どう違ったと思いますか。

経験の幅が大きく違ったのではないかと思う。普通の教科で得られる知識主体の学習だけでなく、実際に調査をして、研究を発表するという過程に高校生の段階で挑戦できたことはとても貴重な経験だったと感じている。海外で発表したり、日本各地で調査をしたりといった1つ1つの過程自体も、自分一人では出来なかった経験だ。本当に感謝している。

8 SSHの学びは、あなたの理系選択に影響しましたか。また、研究したことで学習意欲は高くなったと思いますか。

高校入学前から理系を志していたが、SSHでの経験で研究職への興味がわいた。大学で学ぶ中で進路は変わったが、研究職を視野に進学先を決めるきっかけになったと感じている。

9 現在どのような生活を送っていますか。研究(仕事)はどんな様子ですか。

今の自分に役立っているところはどんなところと考えますか。

比較病理学教室という、動物の死因や病態を学ぶ研究室に所属しており、日々解剖検査や組織検査を行って、亡くなった動物の死因を解明している。並行して卒業研究として宮古諸島固有種であり、絶滅危惧種であるミヤコカナヘビの病理検査を行っている。ミヤコカナヘビが種としてどのような病気を起こしやすいのか、飼育している施設によって起こっている病気に違いがあるのかといったことを調べている。

10 今後の池田高校のSSHについてどう考えますか。期待することなどを教えてほしい。

一人でも多くの生徒の皆さんが新たな興味を見つける機会を得られたらいいと思う。私自身はSSHを通して自分の興味を広げ、深めていただいた。興味分野は人それぞれなので全員が熱中する必要はないと思うが、一度挑戦してみて「やってみたい」「面白い」を見つけた方が、一層深く学べるような経験や交流があったらすてきだなと思っている。